伊藤整全集

第十八巻

伊藤整全集

18

新潮社版

編纂
瀬沼茂樹
平野　謙
小田切　進
奥野健男

求道者と認識者　他
定価二〇〇〇円
昭和四十八年十一月十日　印刷
昭和四十八年十一月十五日　発行
著者　伊藤　整
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話
東京二六〇―一一一　郵便番
号一六二　振替東京八〇八
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社大進堂

伊藤整全集
―18―

© Sadako Itō
1973. Printed
in Japan.

乱丁，落丁本
はお取替えい
たします。

伊藤整全集 第18巻 目次

評　論（昭和31年～同44年）

〈昭和31年・7月――〉
芸術は何のためにあるか　三
創作と批評の論理　二五
堀内伸氏『彩色』等　三五
全集の完結に当って　三五
チャタレイ裁判の意味　三七
質問に答えて　四七
芸術の形式と秩序　五一
純文芸雑誌のこと　六六
人間性と地方性　七〇
『日本詩集』の選について　七三
正義感と芸術性　七四
〈昭和32年〉
傍観者の権威　八三
小説の考え方の変化　九二
チェーホフについての思い出　九六
心理的リアリティ　九八
ないものねだり　九九
大きな政治的変換期　一〇一
文章の骨と肉と皮膚　一〇三
文壇は崩壊しない　一一〇
性の文学と良識　一一三
最終判決を前にして　一一九
石川達三の説に対する感想　一二三
文章技術の実例　一二四
文学界新人賞・選評　一三〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

挨拶状　一三二
チャタレイ事件の判決　一三三
被告伊藤整氏と私　一三三
心理主義の文学　一四五
宇野千代著『おはん』　一五七
文章訂正の実例　一五九
巧妙なさばき方　一六八
映画という芸術　一六九
仕事と批評　一七四
芸術と組織　一七五
The Japanese Concept of Beauty and Goodness　一七九
『生と死と愛』の著者について　一八三
小説家志望の女性に与う　一八六
小説新潮サロン・選後評　一九三

〈昭和33年〉

『インドで考えたこと』　一九六
時間を思う　一九八
革命の中で流される血　二〇〇
売文業の基本方法　二〇七
現代詩に望む　二〇九
「秩序」と「人間性」　二一〇
人間生活と調和　二一三
作家の現実と作品の現実　二二〇
作品集を出すに当って　二二四
男と女の愛情　二二五
ヘンリイ・ジェイムズと「ねじの回転」　二三二
先輩をおびやかせ　二三四
現代小説と大正リアリズム　二三六

芸術家と人気　二三九
中江兆民　二四六
政治について　二四八
道徳と文士の職業　二五七
近代日本における「愛」の虚偽　二六〇
『露伴全集』が完成したことの意味　二六八
ジョイスの夢　二六九
美の意味の歴史　二七二
L'ecrivain et sa vie privee　二七四
体験と思想　二七九
「人形の歌」について　二八五
良識と芸術　二八六
芸術と道徳　二八九
興味あたえた私小説　二九四

〈昭和34年〉

異邦人意識と人類意識　二九五
ヨーロッパの性の意識　三〇八

〈昭和35年〉

文壇と文学　三一七
一　文壇と文学　三一七
二　共産主義と反共産主義　三二三
三　種々の「芸術は必要か」　三三一
四　生活と文学の目標　三三七
五　生活のリアリズムと文学のリアリズム　三四四
六　文壇文学とは何か　三四八
七　愛の世界とは何か　三五五
八　愛というものについて　三六一
九　求道者と認識者　三六九

十　芸術の周辺　三七六
十一　現代文学の世代　三八三
十二　旅行者の感想　三九〇
人間バクロと道徳意識　三九六
小説がすべてでないという変な心の状態　三九九
チェーホフとイプセン　四〇〇
チェーホフの魅力の本質　四〇二
性の倫理と文学　四一四
『灰色の午後』　四一八
政治危機と文学者　四二〇
岸信介氏における人間の研究　四二三
詩が分らないということ　四二六
〈昭和36年〉
チャタレイ組が集まる　四二七
新潮同人雑誌賞・選評　四二八
旅の途上の感想　四三九
現代詩の問題　四四三
『明治初期翻訳文学の研究』　四四八
プライヴァシー尊重　四五〇
文士の実生活と内容　四五四
再び暗黒か　四五七
「純」文学は存在し得るか　四五八
わが小説―『氾濫』　四六八
〈昭和37年〉
私小説とモデル　四七〇
『チャタレイ夫人の裁判』　四七四
散文芸術について　四七六
新潮同人雑誌賞・選評　四八〇

ノーマン・メーラー妻を刺す　四八〇
日本の社会・日本の小説　四八五
純文学像の推移　四九八
『アメリカ感情旅行』　五一一
『天才と狂人の間』　五一三
日本学の天才　五一三
バーナード・ショオの恋愛遍歴　五一四
無想庵の『七人』の頃の原稿について　五一三
女流新人賞の選者の言葉　五二四
『島崎藤村』　五二五
女流新人賞・選評　五二七
『ヴァイキングの末裔』について　五二八
『トランジション』　五二九

〈昭和38年〉

『馬喰の果』　五三〇
地方文学について　五三一
新潮同人雑誌賞・選評　五三三
一つの感想　五三四
職業としての文学　五四〇
戦後新潮談　五四四
大衆文学とプロレタリア文学　五四九
サド裁判の反省　五五一
女流新人賞・選評　五五三

〈昭和39年〉

新潮同人雑誌賞・選評　五五四
小説家と読者と出版社　五五五
一冊の本　五七一
明治の小説の面白さ　五七三
群像新人文学賞・選評　五七五
近代文学館と資料　五七七

独歩と蘆花　五八一
自分の作品と人の批評　五八三
『近代文学』について　五八五
プライバシー裁判を傍聴して　五八七

〈昭和40年〉

新潮同人雑誌賞・選評　五八九
馬鹿といわれる個性　五八九
『徳田秋声伝』　五九五
詩人相次いで世を去る　五九七
『人間宇野浩二』　六〇一
私の希望　六〇二
群像新人文学賞・選評　六〇二
『蛙のうた』　六〇四
二葉亭四迷と近代文学の出発　六〇五

〈昭和41年〉

日本の土壌　六一三
新潮同人雑誌賞・選評　六一四
群像新人文学賞・選評　六一五
トルストイと日本　六一六
わが愛誦詩篇　六一八
谷崎賞・選評　六二四
名著発掘　六二五

〈昭和42年〉

新潮同人雑誌賞・選評　六二六
群像新人文学賞・選評　六二六
日本近代の詩歌　六二八
小説『石狩平野』に寄せて　六三〇
モームの小説　六三一

谷崎賞・選評　六四〇
〈昭和43年〉
明治の文学と現代　六四〇
新潮同人雑誌賞・選評　六四三
日本近代文学と外国文学　六四三
訓告無益　六四五
女流新人賞・選評　六四八
現実となった「名著復刻」　六四九
〈昭和44年〉
老齢の文学　六五一
＊
編集後記　瀬沼茂樹　六五五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

伊藤整全集 第18巻（評論）

求道者と認識者　他

（評論・昭和31年～同44年）

芸術は何のためにあるか

文化国家という言葉が、私の住んでいる日本の上に冠せられたのは、この戦後のことである。神国日本と言うかわりに、文化国家日本と言わねばならぬ、とこの敗戦国の教育者や政治家が考えはじめたものらしい。文化クンショーというものも、戦前または戦時中からあったらしいが、戦後は、格が上り、また人気の対象になった。日本は文化国家だ、だから古典的な価値ありと思われるような外国の絵や日本の絵が、アメリカ人に買われて国外に持ち出されるということを新聞が報ずると、それを日本文化の損失だ、と言う。

いったい、何が損失なのか、私はチャンチャラおかしい、と思っている。何が損失で、何が利益なのか、いったい誰が分っているのか、と問いたいのが私の本音である。私は小説書きで、文学史家のような仕事もしており、外国文学もやっているが、その私にとって、なぜ芸術作品が日本に大切なのか、本当に分らないのだ。文化クンショーというものがあって、永井荷風とか谷崎潤一郎などに与えられ、宮城の前でそのクンショーをぶら下げて写真をとっている。そして日本人として最大の名誉を得たこととして新聞に報ぜられる。これもまた不可解だ。荷風や潤一郎がなぜ偉い人なのか？　その潤一郎や荷風と並んで、その文化クンショーなるものをもらうのはどんな人かと言えば、長年歯車の研究をして歯車製造の理論に関しての世界的権威なる学者とか、医学上に大きな寄与をした学者とか、また時としては鈴木大拙さんのような、世界中に仏教の説明を英語でして歩いた人などである。その他、哲学者、倫理学者など世に尊敬されている人々がその受賞者である。

最近私もおくればせに「四畳半フスマの下張り」という書を読んだ。この本の刊行責任でないにしても、この作の執筆者が永井荷風であることは、私は事実だと信じている。また荷風は最近まで刊行されることのなかった秘本「腕くらべ」の作者である。風紀道徳から言えば彼は好ましからざる存在にちがいない。「痴人の愛」の作者、「卍」の作者である谷崎潤一郎もまた、しょっちゅう発禁、削除の目標とされながら、何十年も仕事をして来た。その二人が歯車

博士や仏教学者や道徳学者たちと同じクンショーをぶらさげる。大正期的な日本人の常識で言えば、この受勲者の写真には、日本の社会秩序を、医学、工学、宗教学、倫理学等で、コツコツと築き上げて来た人間と、それを、色情的な軟文学でぶちこわして来た人間とが、同じクンショーをもらって、ほめられ、当人もいい気持になっているところの、笑うべき場面である筈なんだがなあ、と言うのが私の正直な感想である。刑事の古手とワイセツ犯の古手とが、年とって、両方ともものの役に立たなくなった頃、警視ソーカンから、「いや両方とも、中々よくやった。おかげで日本の社会は繁栄した」とほめられているように見えるのである。

だから、この順序で言えば、かつての共産主義者で、日本の社会秩序の安定を脅やかした革命文学理論の建設者で、いま芸術院会員である青野季吉なども、やがて文化クンショーをもらって、仏教学者や教育学者であった老人たちと並んで宮城前で写真をとることになるであろう。また日本の裁判のでたらめさを十数カ月にわたって論証し続けている広津和郎も、きっと文化クンショーをもらうだろう。今の彼の仕事は、その文化的意義において荷風や潤一郎の過去の仕事に劣るものではないからである。どうも変だ、私の頭が変になったのかも知れない。だが、そうなれば、現にワイセツ文書販売罪の被告である私なども、将来、その理由によって文化クンショーを、田中最高裁判所長官と一緒にもらい、宮城前で握手して、「いや、よくやりましたなあ、おたがいに」などと笑い合う可能性もあろうと言うものだ。私はもちろん、年金つきの文化クンショーをもらうことを歓迎する。

しかし、一体日本人は「文化」の中に科学、宗教、芸術という各種のものがあることを、どう考えているのだろう。つい先月も、その谷崎潤一郎の「鍵」という小説について、この種のものを放置しておいてよいのか、と世耕何とかいう老人の代議士が政府側を問いつめ、政府側のある役人らしい男が、あんな年寄りのいたずらを放っておくのはよくない、とか答えた、という事件があった。「鍵」が年よりのいたずらなら、「卍」や「痴人の愛」は中年のいたずらである。「卍」や「痴人の愛」を書いた男に文化クンショーを与え、「鍵」を書いた年よりはシバった方がいい、というのが役人たちの論理である。全く面白いことになったものだ。いや、まことに結構だ。「鍵」や「四畳半」の作者たち、芸術院会員、文化クンショーのハイジュ者たちを私と同様ワイセツ文書ハンプ罪で起訴し、裁判にかけ、その結果によっては罰金を科するなり、牢屋にブチ込むなりしたら、実に面白いことになるだろう。私が荷風老と同室

でワイセツ文学論をする可能性も出て来るだろう。

役人たちのこのような論理の矛盾はどこから始まったか、彼等になり代って考えて見るのも、このようなデカイ間違いのもとを捜す一方法である。以前から美術院とか日本美術院とか言う名前において、絵描きを集めて、外国並みにアカデミイというものを役人たちは作った。だが、そのうち「文化国家」では、絵描きばかりがアカデミイに入って、文士が入らないというのは変だ、ということに役人は気がついたらしい。文学というものも、芸術であり、従って「文化」の一部分であることが分った。そうすると、その文士の中でも志賀直哉のような、一見道義人の風格を持っているものと、潤一郎や荷風のような軟派またはエロ文学的作家を区別することができない。軟派的であろうが、エロ文学的であろうが、その仲間で偉いと認められる文士は芸術院会員になり、文化クンショーももらうだろう、という順で、もの事は運んで来たのである。

絵描きの仕事というものは、春画やあまりにも性を強調した裸体画でも描かなければ、社会秩序の安定を脅やかすことは、まあ無い、と言っていい。音楽家はもちろん、更に安全である。文士という奴だけが困りもので、あるものは、好色文学まがいのものを書いて芸術だと称し、あるものは、日本の論理の専門家なる法律家の論理を攻撃して、自分の方の論理が正しい、と頑張るのである。

いったい、芸術とは、文学とは何だろう？　こんなものがなければ、世の中は行儀がよくなり、教師や法律家は自分の論理に確信を持ち、青少年は、障子をつき破ることに正義を感じたりしなくなり、学生は革命のショーチョーとしての小林多喜二や宮本百合子のデカイ肖像をかつぎまわらなくなるのである。その上、役人諸氏もまた、自分たちの創設した文化クンショーを与えた人間を縛らねばならないのか、と心配する必要もなくなると言うものだ。即ち、芸術、特に文学なるものは、常に秩序を破壊する第一の力としてこの社会に働きかけるものなのだ。困ったことだ。文士どもも、せめて芸術院会員にしてもらったり、文化クンショーをもらったりしたら、もう少し気をつけて、裁判官や教育者たちの仕事の妨害をやめてくれれば結構なんだが、というのが役人や代議士や大臣諸君の本音であろう。

ところが、どうもそううまくは行かないようである。絵描きは、芸術院に入ると絵が倍とか三倍の値が出るそうだし、俳人や歌人も色紙の値が出るそうだが、小説家や批評家という文士は、芸術院に入ると隠居したと見なされて、逆に市場価値が下る傾向があるほどなのである。そんなものに入ることすら拒絶したのも三、四人いた。大体の傾向から言えば、彼等も名誉心の強い人間だから、入りたいと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.